MGTA によるフェンシングにおける

ミニム～ジュニア期の選手育成プロセスに関する研究

スポーツビジネス研究領域
５００９Ａ００９―４　池内　祥　　研究指導教員：武藤　泰明 教授

第１章　研究背景と意義

平成２２年８月２６日に文部科学省は今後の日本のスポーツ政策の基本的方向性を示す「スポーツ立国戦略」を発表した。その中には５つの重点戦略の目標と主な施策が記述され「世界で競い合うトップアスリートの育成・強化」の項目内の「ジュニア期からトップレベルに至る戦略的支援の強化」には「ジュニア期からの中・長期的な強化・育成戦略」が掲げられている。トップスポーツの成功を規定する要因はマクロ（社会的、文化的、地理、気候変動、都市化、政策システム、文化システム等の要因）、メゾ（スポーツ政策や戦略等によって長期的に影響をあたえる要因）、ミクロ（個人的な遺伝や、コーチや友人といった近い環境に関する要因）の各レベルに分けることが出来る。トップレベルのフェンシングに関して、操作不可能であるミクロレベルの研究は散見されるが長期的に競技に影響するメゾレベルの研究は見られない。よって、本研究ではフェンシングのトップレベルに至るまでの重要な要素とプロセスをメゾレベルの視点から検討する。

第２章　フェンシングに関する基礎情報

種目：フルーレ、エペ、サーブル

年齢別の呼称：１３歳以下「ミニム」、１４歳～１６歳「カデ」、１７歳～１９歳「ジュニア」、２０歳以降「シニア」

第３章　研究方法

調査対象者

本研究では２０１１年のJOCジュニアオリンピックカップの男子カデフルーレの上位８位以内の選手の指導者で、尚かつミニムとジュニアを指導している指導者２名。

調査方法

半構造化インタビュー

分析方法

Modified Grounded Theory Approach (MGTA)により、インタビューから得られたデータを概念にまとめ、その相互関係を吟味しカテゴリーを生成する。次にカテゴリー間の関係を検討し、最終的に結果図（グラウンデット・セオリー）を形成する。

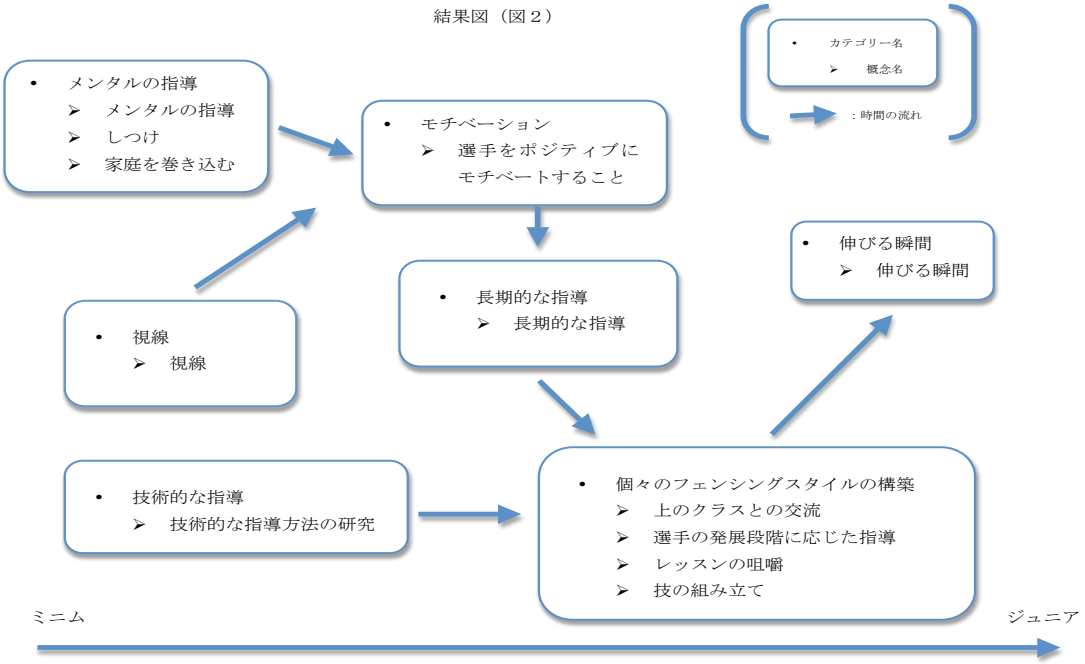
第４章　調査結果

インタビュー調査により２名の調査対象者からデータを収集した。

第５章　MGTA による分析結果

MGTA による分析により１２個の概念と７個のカテゴリーが生成された。それらの相互関係を検討した結果、図２の結果図が示された。

結果図（図２）



第６章　考察

ミニム～ジュニア期の選手は長期的に指導者からの期待の込められた視線を感じながら、メンタルの指導を受け、選手として高いモチベーションを長期的な指導を受ける。また、選手は指導者による段階に応じたレッスンやファイティングを通し、選手独自のフェンシングのスタイルを確立していく。そして、高いモチベーションの状態で長期的にメンタルの指導と技術的な指導が併行して行われ、突如選手の中でメンタルと技術がリンクし試合で高いパフォーマンスが発揮される「伸びる瞬間」が訪れる。

本研究で生成されたグラウンデット・セオリーにより、高い競技力を持つ選手を育成する為の必要条件を提示することが出来たのではないか。